

STUDIO VOICE

MULTI-MEDIA MIX MAGAZINE

NEW YORK, LOS ANGELES, TOKYO, HONG KONG, PARIS, BOMBAY, BRISBANE

Media
mix
Magazine

スタジオ・ボイス

Vol.210
JUNE
1993
600Yen

ニュー・
テキスト

特★集 New Text



スタジオ・ボイス副読本300冊

テキスト・ジョッキー(T・J)登場

対談★上野俊哉×榎本野衣 エレキ・ギターをベンに持ちかえた時

ジャンル別ニュー・テキスト

サイバー、マインド・ゲーム、アメリカ、エロティシズム、サイコ、ガイア、日本、80S

クリエイターが影響を受けたこの一冊



『マルコムX自伝』アレックス・ヘイリー

あの本。すでにアメリカ史の種田たる一部となった書物だ。売人時代から、ブラック・ミュージック時代、そして非分離主義に向かおうとした矢先に殺されるまでの壮絶な一生。もう少し長生きしていたら、と考へるのは無意味だが、惜しまれる。エピソードが著者A・ヘイリーが描くマルコムXは、自伝が伝える冷静で自信に満ちた存在とは別の、混乱しきつた不安な人物であり、マルコムXの不用意な偶像化を戒めてくれる。この本だけでも必読。(河出文庫)



『路上』ジャック・ケルアック

地図で見てても具体的な広がりがないとこない人は、こいつを読むことに。単調な、だからだらしたモロロロに果れば(夏の日曜の原下がり)に読み始めるといよいよ、アメリカの土地が体感できる。アメリカ中をワロワロしてまわったサル・パラダイスことケルアックが、放浪の果てにニューヨークで夕日を見つめながら、西に広がるアメリカの大地と人々すべてをホーツと反響する。その重みをいっしょに感じられる。いいんだだけ。(河出文庫)



『九百人のお祖母さん』R・A・ラプラント

宇宙の果てに、この世のすべての始まりを知っているお祖母さんがいる。という表題作をはじめ、一見すつとほげいでいながら、妙に残酷でシャープな微笑を宿す傑作の数々。リベラルぶりが作家の多い中、天地創造を信じない敬虔な反動カソリックなアメリカ南部白人を自認する逸材だ。もっとも、それさえなやピンチョン以上に騒がれたかもしれない。収録作「山上の壁」は「アメリカ合衆国と併統のこと」。(早川文庫)



『スーパーヒーロー』特殊報道写真集

アメリカ最高のワゴン新聞「ワイリー・ワールド・ニュース」からの報道記事と写真の技。くだらなくも素晴らしいので、ぜひ読むように。でもこうして本になっちゃった。いまいちは個性に欠けて見えるのはなぜかしら。やっほこういうのは、駅のキオスクに並んでほしいよね。宇宙人、フュージョン大統領と会談! そうが、やっぱりウチウウシンはほくを見張ってたのか。いいなあ。(竹書房)

『Semio(text)e』13



前文にも書いたとおり、あんまり身勝手なサブカルチャー系の人たちと耳を揃ける必要はない。ウォーラー・ステインもそう書いてます。ただ、そういうものがあることだけは頭の片隅にでも入れておいてほしい。まあ、こんな本だから、Jesse's Semio(text)eが、そういう人たちの果敢している雑誌はたくさんあるし、いろいろ開きながら読んでやってくれて笑わせてくれますから、目を通しておいてはいいかな。(河出文庫)



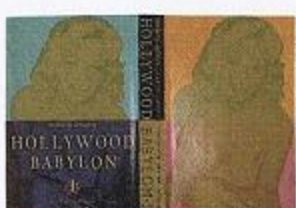
『栄光と夢』ウリアム・マンチエスター

全五巻の大作を通読しようなんてちろん言わないけれど、でも機会があれば(入院するとか、非常に楽しく読める。世界大恐慌から70年経った話、細かいガジェットまで押さえて、しかもバランスのいい本。未だ事件から固有名詞まで何でも載っている。ほくも愛用しています。温度の思い入れや奇抜な視点もなく、アメリカのこく一般的教養人の視点で書かれていて、翻訳は正確無比で、しかも読みやすい。面白い(福思社)

『くもりの空』オクタビオ・パス



これは、世界の将来動向とそのなかでのメキシコの位置付けに関する論議だけれど、作者がメキシコ人なので、隣国のアメリカ合衆国に対する感情はなかなか曲折したものがある。ガルシア・マルケスやフリオ・コルタサルなんかだと、(当然ながら)探取者としてのアメリカという否定的な評価をばきり打ち出しているけれど、パスはそういっただけを認めるつも、むしろアメリカ合衆国について肯定的な評価をしていて考えさせられる。(現代文庫)



『ハリウッド・バビロン』ケネス・アングァー

はいはい、ゴシップですよ、というわけで、昔のハリウッドにまつわる数々のゴシップとスキャンダルを集めた本。ただし、決して楽しく明るいゴシップ本ではない。随筆で、ユーモアはあがる皮肉のかけらさえもなく、一言半句に悪意が漂っていて、すくなく悪意の塊。それがハリウッド自身の持つ露骨の反映なのか、単にケネス・アングァーが陰険なヤツなのかは、各人が読んで判断するしかない。ほくは後者と想定。(ワコホー)



『仕事!』スタックス・ターケル

七百ページもあるこの本、これはアメリカ人が語る、自分の仕事についてのインタビュー集。監修もいれれば売春婦もいる、役人、野球選手、黒人、白人、金持ちも貧乏人も、百人以上の人々が思い思いに語っている。ここから日本もアメリカも共通の資金労働の普遍性を読み取ってほしいし、アメリカ独自のキツイ本音を読み取ってほしい。他にあげた本の半分がある。経済面でも、人権差別でも、メディア面でも、この本に「アメリカのほとんすべてが、生の状態で語られている。読者やプロパガンダとは無縁の、生きられたアメリカ。その未来も、この本を読めば見える。(晶文社)



『アメリカ怪談集』荒俣宏編

SFやホラー系は、細かくやっほしめる必要がないので、ここはお手軽に、古い作品のアンソロジーでお茶をにごす。ポオやアスミタいな大長老から、ラフ・ラフとみたいなこけおとり作家、無意味なほうのブラッドベリと、小さいながらもアメリカ的な怖れに満ちた精神世界をよくまとめて見せてくれる。残虐行為展覧会「仕事」とあわせて読むと、中流市民の愚痴の深みみたいなものが見えて面白。キングの先祖たち。(河出文庫)



『ルビコン・ビーチ』スティーブ・エリクソン

ハラードから始まったこのセレクション、最後はハラードの具体的な無の抽象的な小説で締めよう。作者のアメリカ人、訳者も日本人の解説は要領を得ないが、見慣れたランドマークをすべてはげやとられた、肌をこする風の感傷がやたらと生々しいこの小説世界に、未知のアメリカがあることだけは事実。それを知りたい、ここに挙げた本だけでは足りない。あととあなたが独自に勝手に伸ばすしかないのだ。ではもう一度、グッド・ラック。(読者文庫)

アメリカは若くして肥大しすぎたから、独特にわからないものなのだ。支那なら、その肥大ぶりに応じた歴史を持っている。ソ連も、ヨーロッパもそうだ。歴史があるからってわかるものじゃないが、つまらんネタには困らないし、それを追ってるうちに時間切れになって、わからなくても仕方ないか、という気になる。アメリカはそれがないので、たとえばケネディみたいな国家元首が一人殺されたくらいのもネタで、いつまでも大騒ぎするしかない。あんなもんに日本人がつきあってやる必要なんかないんだよ。

何と言っても大きな国だし、一時は金もあふれてたから、重箱の隅をつけば確かにいろんなものは出てくる。でも、しょせん隅は隅。サブカルチャー系のネタは、ほとんどこの隅で、しょせん添え物的な代替可能なものでしかない。面白がってる分にはいいけど、真に受けないこと。アメリカには極めて強力な支配階級が確立されていて、しかも一方では例の「誰でも大統領になれる」という、抑圧を隠すようなお題目がドーンとぶら下がっていて、その板挟みの中で現実逃避や被害妄想に走らざるを得ない人たちがたくさん出てくるわけだ。「誰でも大統領になれる」というのは、裏返せば「なれないのはおまえが悪い」ということだからね。そういう妄想には、確かにいまのアメリカの現実が反映されてはいる。でも、それだけ見てもダメなのだ。

まず、地理的/社会的/歴史的な実態(に近いもの)を把握すること。そこから広がるイメージとその作られ方を考えること。一方で、世界中の中の位置づけを考えること。飽きたら、暇潰しに周縁的なネタもつまみくいすること。今回の本の選出は、こんな具合にとってもまっとうな、何ら奇抜さのない方針で行われている。わからなければ、とりあえず正攻法で攻めるしかない。その過程で運がよければ、なにが近道が見つかるかもしれない。では、グッド・ラック。

若くして肥大しすぎ、独特にわからないアメリカを
とりあえず、正攻法で攻めてみる
文＝山形浩生



『ジャングルクルーズ』2007年
つげの日生井英寿



これは驚異の書物。ベトナム戦争というアメリカ史上最世の屈辱的な出来事を、米軍兵士たちの記録や、各種雑誌の扱いを中心に、様々な資料を縦横に駆使して書き出す。そこに見えてくるのは、アメリカ自身が感じていた自分の存在意義である。今なお続く、その屈辱と痛恨を描く作者の筆致はまさに驚愕的。日本人の手でこれが書かれたとは、外部の視点の有効性が如何なく発揮された名篇だ。(読者書房・文庫)

『地球の歩き方』2007年
カ



おや、笑ったな。でも、これなくともいから、まず何かのガイドブックでアメリカ大陸の地理的な広がりを知りたい。それと、ニューヨークはアメリカでも少しちがうところ、ロサンゼルスもそのころニューヨークと同じく、アメリカの「地域」といよりは世界都市的な色彩の強い場所になりつつあるんだ、ということを知りたい。それと、その目で読み取るのはつらいけれど、他に手が無い。どうせ行くときに要るでしょ。(ダイヤモンド社)

『競売ナンバー49の叫び』
トマス・ピンチオン



サブカルチャーの被害妄想も、ここまで徹底してやってみたらと羨望らしい。要なアンチ社会と、革命家とか、狂狂者とかが束になっ出てきて、それがみんな、運送郵便制度を使わないという変な所で回結して、それを追っているうちに一介の主婦が、自分もパノニアに陥る、という話……では全然ないんだけれど、その変な陰謀ネットワークこそアメリカだぞうなの(た)だ、という(た)で(た)。(読者書房)

『ラスベガス』
ロバート・ウェンチューリ



ラスベガス一面にはびこる、色きちがいの俗態ネオンサインや看板、無茶なデザインのホテルなどを取り上げて分析した本。日本では、ラスベガスの研究みたいなものは、アメリカの自動車文化が強調されすぎて、単なるポップなもの面白さを力説する書ではない、と訳者は言うけれど、でも、まさにその自動車文化がポップ的な面白さこそ本書の生命線。写真を見ても、面白くないよ。(読者書房)



アメリカそのものが、清教徒による血生臭いユートピア建設が神話的な発端なので、それ以外の挫折したユートピア建設の系譜を見ておくのは大事。その意味で本書は有益だ。記述は悲しいほど通り一遍。著者たちは、これらのユートピアへの愛も持っていない。ユートピアの失敗は著者たちにとって「怒め」で「精神の安全にも有害」だったんだぞやれやれ。一氣に読ませる迫力はなく、けれど、とりあえず手軽でコンパクト。(福音堂出版)

『アメリカ合州国』
本多勝一



本多勝一の数多い著書のなかでも、決して出来がいい本ではない。黒人は白人に差別され、搾取されているのは事実だが、明日にも黒人が革命を起して白人支配を打倒すると、もうわんばかりの書きぶりや、マルコムXの受け売りで悦に入る人たちの姿は、二十年後のいまは(そしておそらく当時も)こっけい。それを除けば、白人たちの露骨な差別感情と差別行為の実態を記録した書物として貴重。この部分の価値は、現在でも変わらない。(朝日文庫)

『ローズウォーターさん
あなたに神のお恵みを』
カート・ウオネカットJr.



白人でも、アメリカの東海岸エスタブリッシュメント支配が耐え難い場合がある、ということ。アメリカの中産階級というやつは、度し難い俗物の集まりだということ。それはさう、さういふような理で、手の上でいらない、向かいたいとは思っている。こんなソツとするテーマでありながら、本書は異様に切なく悲しく愛に満ちている。高校時代に読んでおくのが望ましいけれど、多分たいてい読んではいない。(早川文庫)



『残虐行為展覧会』
J・G・バラード

アメリカはすでにアメリカ大陸北部に限定される現象ではなく、テクノロジーと、経済力と、文化アイコンと、そしてそれに伴う精神病理によって、すでに全人類的な強迫観念の一部を占めている。『残虐行為展覧会』読む本とどういふか、見るといふか、物理学で言う「場」みたいな、その中に自分が置かれるような、そんな本だ。ケネディ、レーガン、モロ、デビッド・ガリアン、自動車の事故、セックス……それが形像のようないくつかの中に、ボツン、ボツンと点在しつつ、われわれのいるこの世界をゆがめる。それこそが、われわれが日々感じ、生きているもの。(早川文庫)

『ボストン・アメリカ』
イマニエル・ウーラステイン



この人が政治学だが歴史学だが国際関係論だがの分野でどう評価されてるのかは知らないけれど、わかりやすく面白かった。アメリカのこれまでの位置付けや、選挙戦争以後のそのボジションの変化に関する冷徹な知識はなかなかうまい。『六十年代カウチカルチャー』は中期的展望がないから、資本主義は二〇五〇年までに終わる(らしい)か、すでに断崖が懸かっている(らしい)。(読者書房)

『ヒテオレタル・ストア
が閉ざして、悲しい。』
マーク・コスタビニ



番外編、だな。語集だから、読む所はあんまりない。でも、この一冊で、ニューヨークの勢いあつてやうに、なんとも理解されないのでないから、ニューヨークだけだ。前にも書いたとおり、ニューヨークはほかのアメリカとはちがうところなんだからね。日が暮れて、一人で歩いていて、なんともコスタビニの読みたいな気分になってくる。読みたければ、解説なんか読んでみて、書にはならないと思う。面白い(らしい)。(読者書房)

『コンピュータ帝国の興亡』
ロバート・M・ウインジャー



田原耕一郎のアホ面つきの将を破り捨てたこの本を讀もう。副題のシリコンバレーの連中がいかにかつてカッパリ儲け、海外の融合を破壊しつつ、未だにガリフレントがでないのか、でもわかるといふ。中身は面白い。でも、コンピュータ、アメリカン・ドリームの話、社長の子がどうも居心地悪そうにコンピュータ業界の成功者連中。まちがって成功しちゃったか、そのサブカルチャー集団の、可笑しくできちゃった悲しい物語。(読者書房)